

法政大学学術機関リポジトリ

HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2025-07-03

ドストイェフスキーとシドローフスキー

近田, 友一

(出版者 / Publisher)

法政大学教養部

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

法政大学教養部紀要 / 法政大学教養部紀要

(巻 / Volume)

17

(開始ページ / Start Page)

19

(終了ページ / End Page)

34

(発行年 / Year)

1973-03-31

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00005208>

ドストイェフスキーとシドローフスキー

近 田 友 一

シドローフスキーという奇妙な「詩人」の存在は、ながらくドストイェフスキーの伝記作者たちを悩ませつづけてきた。二人の交遊期間は作家の工兵学校時代初期の二年余にすぎないが、ドストイェフスキーの交友関係中で最も曖昧にしてかなり重要なもの——との定説がすでに出来上っているかのように見える。この正体不明の「若き日の友」に伝記作者がふりまわされるゆえんは、シドローフスキーに対する評価をドストイェフスキーが終生かえようとしなかつたことに、主として、由来している——青春の熱病からの覚醒と同時に、いわば、「シルレル」とともに、シドローフスキーも過去の彼方に葬り去られても何の不思議もないのだが、この無名詩人に対する彼の愛着と敬慕の念は晩年にいたるまでかわっていない。思想的な面での共鳴とか背反とかいったようなことを別にしても一人の人間に若年時と同じ感情をいだきつづけるのは至難のわざであろう。このことは、例えば、作家のペリンスキーに対する態度などからみても自明なのだが、シドローフスキーのみは例外と言える。

L・グロスマンの伝えるところによれば、作家は、シドローフスキーに関する記述について、最初のドストイェフスキー伝⁽³⁾の執筆者オレスト・ミルレルに特に釘をさしている――

必ずあなたの文章の中でシドローフスキーについて述べて下さい。誰も彼を知らないとか、また、彼が文学的名声を残さなかったなどということは構わない。お願いだから、君、書いといて下さい。私にとっては大きな人間であつたし、彼はその名前が消えてしまわないような価値をもった人物なのです。

ヴラジーミル・ソロヴィヨフ⁽⁴⁾との晩年の親交をめぐる挿話も、アンナ夫人の言を信じるならば、その間にシドローフスキーの面影が介在している。

評家にとって、この奇矯な詩人は、いずれにしても、かなり厄介な存在たらざるを得ない。

現在我々の手にし得る最も詳細なシドローフスキー研究は、M・アレクセーエフの二十数頁の小冊子⁽⁵⁾のだが、一読後、特にシドローフスキーについての認識があらたまつたとも思えない。この小著は、むしろ皮肉なことに、シドローフスキーひとり調べることの無意味さを示している。二人の間にはスタティックに定着出来ない何物かがあり、詩人はドストイェフスキーから引離され、分析されることによって精彩を失う。このことはシドローフスキーという人物の価値自体の問題というよりも、彼等の結びつきの特徴を示唆するように思われる――その結びつきは思想的なものではなく、きわめて感性的なそれであつたと察せられる。いうなれば、シドローフスキーの「思想」を追つてみても、それは、彼がドストイェフスキーに及ぼした影響力を直接に説明するものでもなく、また、彼等の交遊

の意味を明らかにするものでもないのである。ここにシドロロフスキーをめぐる主題の孕む困難さがある。

シ・シドロロフスカヤの伝えるところによると、イヴァン・ニコラエヴィッチ・シドロロフスキーは一八一六年生れとされているから、ドストイェフスキーより五歳ばかり年長になるわけで、ハリコフの大学で法科を卒え、大蔵省に職を得ている間に、息子たちの受験準備のために上京していたミハイル・ドストイェフスキーと知己になったのが縁で、ドストイェフスキー伝に名をとどめることになる。

ドストイェフスキーの手紙に彼の名前が出てくるのはかなり早く、すでに三七年七月及び九月の父ミハイル宛のものに見出されるが、これはシドロロフスキーの挨拶を伝えただけのものにすぎない。その後、三九年五月十日付父宛の手紙で事務的な用件にふれている以外、四十年一月元旦の兄ミハイル宛の書簡までこの詩人の名は現われていない。これまでシドロロフスキーについて我々に唯一の確実な資料を提供していたこの手簡から推定すると、シドロロフスキーとの交遊は三八年から九年にかけての冬を頂点としてその年の末までつづいたように思われる。勿論、父宛の手紙からみてもシドロロフスキーとの交際がペテルブルク遊学時代のごく初期からつづいていたことは明白だが、彼の「ロマンチックな友情が激した」のは八年の暮から九年の早春にわたる時期——想像を逞しくすれば、三八年十月の「落第」⁽⁶⁾以来でもあるように考えられる。消沈した心が彼をして一層シドロロフスキーに近付かせたという推定も成立つてであろう。

彼等の交遊はプーシキンの崇拜というような共通のモチーフではじまり、初めはシドロロフスキーの指導でドストイェフスキーが西欧の浪漫主義文学の所産を耽読していた程度であったが、この三八年末頃からドストイェフスキーの彼に対する態度は、作中のヒーローを彼の中に見出そうとするものに——「肉体をもった理想像」をシドロロフス

キーのうちに描き出し、その幻想に愛情を傾けるといふような、信仰者の心理にも似た心情をともなったものになつていたように思われる。一八四〇年一月元旦付兄ミハイル宛書簡――

彼を一目みると、これは受難者だな？と判ります。彼はすっかりやせ衰えて、頬はこけ、濡れたような眼は熱い炎にもえています。彼の顔の精神的な美は、肉体の衰弱とともに高まってゆきました。(中略) ぼくの前に立っていた者は冷淡な人間でもなければ、不自然な情熱の空想家でもなく、美しい高揚した魂の持主でした。シェークスピアやシルレルのあらわしたような正しい面影をもった人間でした。しかし、彼はその時もう、バイロンの人物の陰うつな妄想に惹かれそうになっていました。よく我々二人は何か訳のわからないことをしゃべって夜じゅう過したものです。ああ、何という率直な、清らかな魂でしょう。

この誇言めいた表白からシドローフスキーの姿を想像するのは容易なことではない。ドストイェフスキーの最もロマンチックな時代にシドローフスキーのような典型的な浪漫主義者が、彼の前に現われたことの中には、神の皮肉さを感じられる。

文学史的に見ると、ロシア文学に西欧のロマンチズムの影響が現われ始めたのは、一八一〇年代頃からであるが、擬古典主義の狭隘な規準を否定し、形式においても、内容においても文字通り自由を求めたこの新思潮は、祖国戦争によって民族的社会的自覚を促され、理想主義的な自由思想に酔っていた新興の知識階級の間に単に文学思想としてばかりでなく、一種の政治思想として熱烈に受け入れられたのである。二十年代初期のロシア諸雑誌は競って西欧のロマンチズムの作品を掲載した。例えば、『モスクワ報知』は主としてドイツ系でシルレル、ホフマン等を紹

介し、『モスクワ電報』は、英、仏の浪漫主義——スコット、バイロン、ユーゴー、メリメらの文学をロシアの読者に馴染ませた。劇場も官憲の眼を気にしながら『群盗』や『エルナニ』を上演した。かくて二十年代後半にはロマンチズムは完全にロシア文学を支配し、西歌の浪漫派の詩人や作家の名前が知識階級の会話に不可欠な要素となったのである。彼等はバイロンの『幻滅』に甘い陶醉をおぼえ、ホフマンの幻想に耽溺し、シルレルの『反抗』に共感し、ユーゴーのリベラリズムを崇拜した。

シンドロフスキーはこのロマンチズムの洗礼を徹底的にうけたインテリゲンツのバタインみたいなものだが、それと同時に、彼の中にはかかる時代風潮を超えた何物かがあり、ドストイェフスキーとの関連においては、むしろ後者の方が重要な意味をおびてくるのである。

若年のドストイェフスキーは詩人の風貌を受難者にたとえたが、N・レシエトフの回想⁽⁷⁾によると、彼は、いわゆる尋常な「受難者」のイメージからはかなり隔たる。

ペテルブルクから帰村した後、シンドロフスキーは、コロチャ市の、その当時リジンスキー竜騎兵連隊に勤務していた兄の処へやってきて、将校の夜会や酒宴の仲間入りをした。彼が領地管理の仕事を放擲して、時々、奇妙な衣服をまもっては家をとび出し、修道院を訪れるのには母親も音をあげていた。

イヴァン・ニコラエヴィッチの個性は多くの点できわめて際立ったものがあり、風貌からして普通の人間とは違っていた。非常な長身で、眼に美しい表情があり、その明晰な知性と立派な教養ゆえに、誰にも好感をもたれた。何人をも惹きつけずにはおかなかった彼の魅惑の最たるものは、その雄弁であった。イヴァン・ニコラエヴィッチが聞き手に与えた印象は強烈であった。これは当時二十歳の青年であった私自身の経験したところである。

この文章の中にあらわれているのは、ドストイェフスキーの言う「受難者」の顔ではなくて、むしろ、教祖の相貌であろう。シドローフスキーのこの求心力的な才は二人の関係を見る場合に看過し得ない点である。凡庸なロマンチシストの思想も、シドローフスキーの口を通すと、独創的に響く…… 三九年一月一七日付兄ミハイル・ドストイェフスキー宛シドローフスキーの断簡——

あなたの詩はその優雅な姿によって、私を幼年時代へ、現代の詭弁やバイロンの狂暴なエゴイズムに無縁な単純さへ——それなしには神の国に入り得ない単純さへ呼返してくれます。かつて、ポレボーイは私の前でいみじくもこう言いました——「人類の中にある偉大なものを表わす手段として人間をみる必要がある。しかし、肉体は——粘土の壺は、おそかれ早かれ粉々になるであろう」と。

この「素焼の壺の中に閉じこめられている魂」という発想はシドローフスキーの気に入っていた。「わが親愛なる沼の底は新婚の床のように人の心を情熱的に招く」——死への決意が甘美な幻想をともなって彼を訪れたのは、自然の理であろう。

周知の如く、ほとんど同じ発想が一七歳のドストイェフスキーの書信中にみられる——

いつぼくのわびしい想念がおさまるやら、自分でもわかりません。人間に宿命として与えられている状態はただ一つです——人間の魂の雰囲気は天と地の結合から成り立っているのです。人間は何という非合法な子供でしょう。精神の本性の法則が破られているのですから…… この世界は、罪深い想いにくもらされた天の精霊のた

めの煉獄みたいな気がします。この世が否定的な意味をとったので、高速で優美な精神的なものから皮肉が出てきた、そんな風に思われます。もしこの画面の中に全体と効果も思想もわかない人間、つまり、全く関係のない人間が飛びこんできたとしたら、一体どうなるでしょう？「画面は台なしになって、存在することが出来ません。

しかし、全宇宙がその下で悩んでいる固い殻だけを見ている中に、意志がただ一度爆発しさえすれば、この殻を破って永遠と融合することが出来るということを知り、それを知りながら創造物の中で一番の屑でいるとは：

……なんといいわしい（下略）（二八三八年八月九日付兄ミハイル宛）

“地下室”の原音とみなされているこの「思想」が、シドローフスキーの影響下にあったものか否かは、かなり微妙な問題である。時間的には、シドローフスキーとの邂逅の後になるのだが、当時の彼等の交際の度合からみると、また、この前後の文章から判じると、やはり、これはドストイェフスキー個人の発想の色彩が濃いとみた方が妥当であろう。むしろ、焦点はその発想の類似性にある。

この表現には、ロマンチズムとその裏返しとしてのニヒリズムめいたものとの混淆がみられる。ロマンチリストとしての彼の中には、いわば、“同種にして対蹠的なもの”が入りまじっている。ただ、ドストイェフスキーにおいては、「ニヒリズム」がロマンチズムの修飾として終始しなかったことに意味がある。一七歳の「形而上学」がその表白を支えている——人間はその「背理的な生」を維持している限り宇宙の秩序に参することは不可能であり、従って生を絶つことのみが人間に残された唯一の可能性である……………

この「思想」のモチーフは兄ミハイルとの別離⁽⁸⁾を具体的な媒介としてあらわれてきたと言える——兄弟である以上に親友でもあったミハイルとの別離は、単なる人間関係上の孤独の他に、彼の思想自体にも「孤独」の思念をもたら

した。個人的日常的なものから人間全体の形而上学的問題——人間存在の孤独というテーマにまでひろがったのである。人間は「宇宙の孤児」という思想——人間は宇宙の秩序から自分が除け者にされていることを意識せざるを得ないという観念は、三十年の歳月をへて、イッポリートの独白にまで発展し、「おかしな人間」⁽⁹⁾につながる胚種を秘めている。

生と死の解釈をめぐってドストイェフスキーとシドローフスキーの歯車はある一個所——永生への希求——でかみ合う。二人の人間を結んでいた宗教意識はロマンチズムに似てある部分でそれを超えたものがあり、彼等の友情はこの意識を根底として、同時にシドローフスキーのつよい個性によって維持されていたのであろう。

ドストイェフスキーがシドローフスキーに「受難者」の顔を見、そこに彼の宗教性を直観していたことは、謬りではなかった。帰村後のシドローフスキーの言行はすべてその宗教意識の実践に集約されていたと言っても過言ではない。L・シドローフスカヤの手記——

シドローフスキーがペテルブルクにいた期間は短かった。彼の健康はペテルブルクの気候に耐えず、間もなく彼は退職して母のいる村に移り住んだ。家では彼は何か大きな仕事にかかっていて、ロシア教会史を書く準備をしているのだと言っていた。しかし、学問的な仕事が彼の精神的活動をすっかり吸収してしまうというわけには行かなかつた。内的不調和、周囲の一切のものへの不満足——これが彼をして五十年代にヴァルスキー僧院に走らせた原因であるように思われる。だが、ここでも彼は満足も精神的安静も見出せなかつたらしい。シドローフスキーは順礼としてキエフ行を計画し、キエフである長老に頼ったが、長老が帰村を慫慂したので、彼は自分の村で新発意の服を脱がず晩年まで暮したのである。シドローフスキーの教奇な浮沈の多い生涯は、彼のつよい

情熱と激しい気性を証拠立てている。

三十年代のロシアは、ドイツ観念論哲学のつよい影響下にあって、知識階級の間にはロマンチズムの一変形として宗教的意識が滲透し、宗教的気分が昂揚された時代ではあったが、シドローフスキーが本来持っていた宗教性は、やはり「流行」とは異質のものであったと思われる。ロマンチズムの衣裳をまといながら、より根元的な次元で生の「形」を求めている彼の姿勢の中に若年のドストイェフスキーは自己と相似の要素を認めたのであろう。

後年、「死の家」から戻ってからも——「美しく高遠なるもの」の時代との訣別の後にも、ドストイェフスキーがシドローフスキーの評価をかえず、詩人に異常なまでの愛着をいだきつづけていた事実は、流行衣裳とは無縁な彼等の精神内部の有機的な結びつきを証している。

周知の如く、四一年にドストイェフスキーは二篇の習作戯曲——『マリヤ・スチュアルト』と『ボリス・ゴドノフ』をかいている。アレクセーエフは『ドストイェフスキーの戯曲の試み』の中で、この二つのエチュードをシドローフスキーの影響によるものと断じているが、散佚した作品からの断定は所詮無理であろう。シドローフスキーのイメージを想定してかかれたものとほぼ推定出来るのは第六作の『女主人』¹⁰⁾である。オルディノフには、シドローフスキーと若年期のドストイェフスキーの混淆した面影がある。この作品では作中人物と作者の心情が奇妙に通い合い、主人公の周囲には一種の雰囲気が漂っている。小説として失敗しながらこのようなことは稀であり、作家の主人公への傾斜度が作品を乗りこえてしまった一例であろう。

オルディノフはその登場から終局まで終始一種得体の知れない情熱にとらわれている。

ごく幼い子供の時分から彼は特殊な生活をしてきたが、今やこの特殊性がはっきりした形をとった（彼は一つの情熱に蝕ばまれていた。それはオルディノフのような人間にあっては、世間的実際的な活動の領域に断じて席を譲らない情熱、生涯人間を消耗させずにおかない情熱、極めて深刻な、極めて貪慾な情熱であった。それは學術である）。この情熱は今のところ彼の青春を食いへらし、酔わすような毒で夜毎の安眠をそこない、健全な食物と新鮮な空気を奪った。

「情熱」はときに「學術」であったり、ときに「芸術」であったり、不安定な様子をみせる。オルディノフが自らもて余していたのもこの曖昧にして確固たるパッションであり、ドストイェフスキーが描きたかったのもこの不明な、謎めいた感情であろう。作家はこの「生涯人間を消耗させずにおかない情熱」の所有者の中に「悪かれた人」を見た。シドロフスキーはその典型であり、ドストイェフスキーもまたそうした性格的な要素を部分的にもっている。方向を見出し得ない情熱はただその持主を疲弊させることに役立つが、彼にはそれが陶醉となり、有害無益なるがゆえに魅惑となる——『女主人』の作者はこの間の事情を知悉していた。

この厄介な熱病の表現は、二つの形態——直情径行的な行動と内部世界への沈潜——に集約される。シドロフスキーにおいては神によって媒介されていたものが、オルディノフでは女性——「女主人」を媒介として表現されている。修道院、伝道という前者の道と、閉鎖的生活、幻想的な愛という後者のそれは、現実に対して城壁を築こうとする姿勢——日常生活からの脱出を意図する一点で交叉する。

ドストイェフスキー文学には、「現実とは何か」という問が終始一貫して流れているが、初期のドストイェフスキーの現実を捉える角度にはシドロフスキーの影響が看取される。要言すれば、それは第二の現実の設定であるが、

『分身』¹¹以来作家は種々形をかえてこの「現実」の創造を試みている。初期の精神分裂的傾向、妖術趣味、後期の神秘主義の様相も第二の現実を定着しようとする試みのあらわれであつたと言える。初期は形而下的であり、後期はより形而上の意味をます。

『女主人』の「現実」には作者の意図が明確に表現されている——「女主人」は『白夜』¹²、『ペテルブルク年代記』¹³ともにドストイェフスキーのいわゆる「空想主義」の所産とされているが、初期のドストイェフスキー文学を規定する重要なエレメントの一つであるこの「主義」は、その発想の過程においてシドロフスキーの影を色濃く宿している。しかしながら、空想主義は、厳密な意味では、思想でも主張でもない——それは、いわば、一個の現実解釈であり、より主体的には、ドストイェフスキーの「深刻にして貪慾な情熱」を処理するためのだてに他ならない。作家は空想主義に基いて現実を截断することによって彼の情熱を昇華させることを得た。ドストイェフスキーは現実解釈をシドロフスキーに学び、この「解釈」に共感する素質を一種の「タイプ」として分類した。『ペテルブルク年代記』には、彼のいう「タイプ」の定義が述べられているが、そこには師であり、またモデルでもあつた人物の特徴が捉えられている。

彼等は主として、寄りつくことも出来ないような片隅で深い孤独の中に住んでいる。それはさながら人間からも世間からも隠れようとしているかの如くである。概して、彼等を一目見たとき、何かメロドラマ的なものが見映るほどである。彼等は気難しく、家の者とも口数をきかず自分の中に沈潜しているが、怠惰な軽い瞑想的なもの、やさしく感情に働きかけるもの、もしくは感覚を刺激するものなら何でも、とても好きである……

空想家はいつも重苦しい。というのは、極端にむらがあるからである。あまり陽気すぎると、あまり気難しすぎ、暴れものであるかと思うと、注意が行届いてやさしく、エゴイストかと思えば高潔無比な感情を働

かす力ももっている。

これらの記述はそのまま、シドローフスキーの伝記に流用することも可能であろう。それと同時に、この描写が地下生活者に通じることにも注意しなければならない。

約言すれば、ドストイェフスキー文学において、空想主義の占める役割は大したものではないが、地下生活者の発想との類似においてそれは初めて意味をもってくるのである。シドローフスキーはフォードルに現実を変革して見る眼を教えた。弟子は素朴な教訓を徹底して、遂には、シェストフのいう「死の天使の眼」⁰⁴を得たのである。この「眼」はドストイェフスキーの資産となった。ドストイェフスキーはその最初の機微を与えてくれた師の恩を終生忘れなかった。おそらく、それは過剰な謝恩であろうが、また、影響とはつねにそうしたものである。

☆

シドローフスキーの「現実とは何か」という問は、つねに彼の宗教意識と結びついていた。彼にあっては形而下的なものと形而上なものが背反することなく、密接に結び合っていたと言えよう。この傾向は、すでに彼の詩人時代から始まっている。一七歳のドストイェフスキーの意識が、彼のこの性向と相触れ合ったことについてはすでに述べた。しかし、それ以後のシドローフスキーが、彼の宗教意識の実践という形で現実を捉え、自己の生を創造していったのに較べて、ドストイェフスキーは必ずしも少年時の宗教意識に忠実ではなかった。空想主義はその現実認識において、「全宇宙がその下で悩んでいる固い殻」を見つめることによって得た一七歳の認識とは「地点」的にだいぶ隔っている。空想主義には、生との思いつめた対決はない。ただ、人間の認識行為の意味の素朴な探求がある。その視野は拡がり、以後のドストイェフスキーの現実解釈の可能性の深化をうかがわせる。おそらく、そこにこの不思議な

「師弟」の才能の差を見ることは容易であらう。だが、そういう比較は何物をも説明しない。シドローフスキーが詩人的直感に頼って直線的に「生」の意味を追っていたのに対し、ドストイェフスキーが哲学者の余裕と小説家のディレクティブなリズムをもっていたにすぎなからう。

「永生」に対するシドローフスキーとドストイェフスキーの発想は近似していたが、二人がこの観念を具象化していったプロセスはかなり逕庭があるとみることが出来る。

シドローフスキーにおいては、「永生」と自殺を同一線上におく「思想」は、詩人が修道僧になることによって消去され、修行と布教という具体的な行為が現われてくる——信仰とその実践によって「永生」につらなろうとする線が以後の詩人の生を規定してゆく。克己という形での主体性の確立と、民衆の救済という形式での客観的な倫理的価値を有する行為が彼の存在を支えてゆく。

ドストイェフスキーの空想主義では、後者——価値ある行為の欠如が、メチターチェリストヴォー形成の要因となり、シドローフスキーの実存とはここから完全に分岐し始める。

行動に対する渴望は我々の間で何か熱病じみるほど押えきれないような焦燥に達するまでに立ち至っている。

誰も彼もが真剣な仕事を望んでいる。多くの者が善を行いたい、世に益をもたらしたいという燃えるような願望をいだいている（『ペテルブルク年代記』）

ドストイェフスキーは空想家の二律背反の中に「意味」を認めた。行動への渴望と自己沈潜を交錯させることによって、彼は自分の思想の支点を得たと感じたに相違ない。これは、やがて地下生活者、ラスコーリニコフへ発展させ

られるべき道である。

空想主義はシドローフスキーから得た萌芽をドストイェフスキー流に消化したものであり、作家は『女主人』をはじめとする空想主義の一連の作品によってシドローフスキーとの関係に収支を出したのである。一方、『永生』の問題はドストイェフスキーの中であって絶えることない底流として流れつづけ、「イッポリートの告白」という中継点を経て、三二年後の『悪霊』で再び地表に姿をみせる——この現われ方は、一見異常にみえて異常ではない。容易に現われるには間そのものが重すぎた。この間彼はあまりにも多くの体験をした——一つの信仰や一個の思想が一人の人間を支えつつけてゆくことの困難さを体感した。黒衣のシドローフスキーと赤衣着物の作家とでは、信仰の次元も自ら異なる。

☆

一七歳の自殺哲学はキリーロフに受継がれる。少年ドストイェフスキーは意志の実行（彼の表現に従えば、「ただ一度の爆発」と永遠との融合をシノニムにおいたが、キリーロフではウエートはほとんど前者にかかる——自殺の自己目的化が彼の人神思想を支えている。この「坊主以上に神を信じている」ニヒリストの「永生」に対する態度はかなり曖昧である。——言葉では来世を否定しながら、彼自身は自殺によって存在の神秘に参入しようとする……おそらく作家が描きたかったところも、そうした自己矛盾の中にあるキリーロフの清潔の体臭であろう。ドストイェフスキーの創造したニヒリストの中であって彼は、その大言壮語にもかかわらず（むしろそれによって）最もつましい存在であり、愛すべき人物である。少年時の哲学を彼に負わせ、同時に、キリーロフをこうした形象に仕上げたことの中には、作家の愛着と余裕が感じられる。すでに、ドストイェフスキーの中では、『永生』の観念は、自殺とは異った次元に移され、彼の文学の集大成的な主人公たるべきアリョーシャによって展開されるべく用意されていた

のである。

年少の友人、哲学者ウラジミール・ソロヴィヨフがシドローフスキーに似ていたという「伝説」がある。それは主としてアンナ夫人の言葉に拠っている。

私の夫はソロヴィヨフにいつもこう言っていました——「私があなを愛するのは、あなたの中にシドローフスキーの面影をみるからです」

「カラマーゾフ」の執筆時に、ソロヴィヨフの影響があつたことは周知の事実であり、アリョーシャにソロヴィヨフの面影をみようとすると評家も少くない。シドローフスキー、ソロヴィヨフ、アリョーシャ三者の微妙なからみ合いは、作家の「永世」の觀念に重要な意味をもつ。それが晩年、ひとりソロヴィヨフによってのみもたらされたと思ふのは狭きに失するであらう。一七歳の「哲学」からの——シドローフスキーとの交遊からの發展ともみるのが、ある面では自然であり、そこにまた、シドローフスキーの最大の意味もあるのであらうから。

- (1) 陸軍中央工兵学校
- (2) 一八三八年—九年（二七歳—一八歳）
- (3) アンナ・ドストイェフスカヤ編『ドストイェフスキー全集（全一四巻）』第一巻△伝記・書簡・覚書▽一八八三年刊
- (4) ヴラジミール・セルゲエヴィッチ（一八五三—一九〇〇）哲学者・詩人
- (5) 『F・M・ドストイェフスキーの若き日の友』一九二二年刊
- (6) 代数の単位をおとし、進級試験に失敗
- (7) (5)と同書
- (8) 三八年一月ドストイェフスキー兄弟は工兵学校を受験したが、兄ミハイルは校医の誤診で不合格、レーヴェルへ赴く
- (9) 『おかしな人間の夢—空想的な物語』（『作家の日記』一八七七年四月号）
- (10) 『祖国の記録』一八四七年一月号
- (11) 『祖国の記録』一八四六年二月号
- (12) 『祖国の記録』一八四八年—二月号
- (13) 『セント・ペテルブルク通報』四月—六月
- (14) 『自明の超剣』—ドストイェフスキーの哲学』一九二九年刊
- (15) ホルバインの絵をめぐる考察の中でイエスの復活と永生の問題が触れられている
- (16) アンナ・ドストイェフスカヤ『回想』一九二五年刊